

辞書のはなし 吉田 明

多様な国語辞典が出版されて話題になっている。

私が国語辞典を引きはじめるようになったのは旧制中学の一年生の時である。東京の下町では小学校を卒業すると半数以上の者が工場に勤めに出たり商家の奉公に行くという時代で、豊かでない家計にもかかわらず中学に入れてもらったことを有難いという思いは子供心にも持っていた。

国語の時間の第一日目、のちに太平洋戦争に出征して戦死してしまわれたM先生が辞典として新村出編の『辞苑』を推薦し、どんなに素晴らしい辞書であるか激賞されたのであった。帰宅して母にすぐ買いたいのでお金を呉れとせがんだが言を左右にしてお金を出してくれないのである。二元五十銭か三元五十銭くらいだったと思う。同級生たちは誰も買い込んで休み時間に開いてみている。二・三日後、矢も盾もたまず押し入れの中にもぐり込み夕食に呼ばれても行かないというストライク戦術に出たのであった。考えてみればなんと愚かな又いじらしい行動をとったものである。しかし、それ以上に父や母、わけても母の心中いかばかりであったかと、今にして親不孝なことをしたものだと思う。



半月ほどたって父から母、母から私へと辞書を買うお金が渡され『辞苑』はわが物となった。その夜は夜中の一時か二時まで『辞苑』の頁の匂いをかぎ、背表紙を撫でさすり、あちこちをひらいてすごしたのであった。

その後『辞苑』は、国語の勉強だけでなく性に目覚めた少年の百科辞典の役目も果たし、「愛」だとか「恋」だとか「性」だとかに関連する言葉を引いては胸をときめかせたりした。韋編三たび断つほどではないが、戦中・戦後にまたがって引きに引いて可成りぼろぼろになって、もう手許にはない。

『辞苑』は今『広辞苑』になっているが、私にはむかしの濃紅の表紙の『辞苑』が懐かしい。
(法学部教授)



北海道立図書館所蔵
(博文館 昭和10年2月発行/3円20銭)

標題・表紙のこと

XOΛIM

標題の「ホルム (XOΛIM)」はロシア語で丘の意。地名 (西岡) に因んで付けました。

図案文字は、丘をイメージしています。

表紙の写真は、砂澤ビッキ(1931-1989)の彫刻「午前三時の玩具」(1987)の写真で「砂澤ビッキ作品集」(1989年 用美社刊)から涼子夫人および発行者のご好意により転載させていただきました。

自然を象徴する「ホルム」と自然から生み出された、砂澤ビッキの「木の彫刻」の組合せて創刊号の表紙を飾りました。

ブー  メ  ラ  ソン  文庫

図書館にも軽い読物という要望を、人手も費用も掛けず実現しようという発想から、貸出手続なしの自由な文庫として誕生しました。この文庫の本は、すべて先生や先輩そして仲間からの善意の贈りものです。この種の文庫は、JR、地下鉄、企業等図書館以外のところでも、既に実施されており、好評を博しています。しかし、本が戻ってこないというのが悩みのようで残念です。その実情を承知の上で敢えて実施したのは、一人でも多くの学生に本をという情熱のゆえです。また概して図書館は、資料を大切に思うあまり「性悪説」に傾き勝ちですが私たちは「性善説」を支持し、ブーメランのように必ず戻ってくることを信じているからです。文庫本の寄贈をお待ちしています。